

郷土資料館の

お宝探訪

Treasure
1 狐狸ヶ池で採集された1万5千年前のヤリ先



▲石ヤリが発見された狐狸ヶ池



▲有茎尖頭器
(左:狐狸ヶ池 右:野添)

郷土資料館の大事な仕事のひとつに、播磨町の歴史を彩る様々な資料の収集や保管があります。本年度は、数ある資料館の収蔵品のうち、代表的なものを紹介していきます。広報はりまの掲載月にあわせ、関係資料を展示します。ぜひ、本物を見に来てください。

播磨町郷土資料館 ☎079(435)5000

長く続いた氷河期がようやく終わり、次第に地球全体が暖かくなった今から1万5千年ほど前、人びとの生活にも大きな変化がありました。それまで食料資源となっていたナウマンゾウやオツノシカといった大型の動物が死滅し、シカやイノシシのような小型の動物が中心となりました。こうした敏しような小型動物を捕まえるためには、新しい道具の発明が必要でした。それにあわせて調理するための道具も工夫され、煮炊きのできる土器が発明されました。縄文時代の始まりです。

さて、今回紹介するものは、正式には「有茎尖頭器」(または「有舌尖頭器」といいます)で、狐狸ヶ池(大遺跡の南側にある、橋の架けられている池)で採集されたもの(写真左)で、縄文時代が始まる前後に使われた道具です。長さ6・76センチメートル、最大幅2・24センチメートル、厚さ0・68センチメートルで、左右対称形にみごとに石を打ち割って作られた、とても美しい形の石器です。細く突き出した根元である茎(中子)を作り出し、木棒の柄に突き刺して棒の外側を樹皮で縛ったものです。現代の私たちでは、こんなにきれいな石器を作るとはとても難しいでしょう。

石材は、近畿地方では最も一般的な香川県や奈良県で出土するサヌカイト(通称、カンカン石)という硬い原石を、完成した形をイメージしながら順次、規則的に打ち割り、細かな加工をして製品として完成させています。各地から似た形のものがたくさん出土(例えば、写真右の破片は、漬目池で拾われたものです)していることから、何人もの人が同じ形をしたものを作っていたようです。石割の順序、加工の方法などのルールがちやんと確立し、伝達されていなければ作れません。

この石器の用途は、いろんな説がありますが、一番有力なのは動物などの獲物を捕るための投げやりです。やりといえば、戦国時代の合戦で使われたような人を突き刺して殺傷するという「槍」を思い浮かべますが、この石器は主に投げつけて獲物に命中させるという使い方が多かったようです。

うまく獲物に命中しなかったのでしょうか、必死に探したものの、行き先が分からなかったものが、1万5千年後に、ひょっこり顔を出して拾われたという貴重な資料です。

播磨町郷土資料館 館長 井守徳男

町の人口 3月1日現在 (住民基本台帳人口+外国籍人口)
34,625人 (-19人) 男...16,985人 (-8人) 女...17,640人 (-8人) 世帯数...13,978 (+2)

